

アンサンブル ソラ
Ensemble Solla

5



2015-02-21

ごあいさつ

Ensemble SolLa（アンサンブル ソラ）の第 5 回演奏会によるこそ。今回は、あまり演奏されることの多くない 19 世紀フランスの二重唱歌曲を。さらにフリュート・トラヴェルシエルとチェンバロによる 18 世紀フランスのソナタ、休憩を挟んで後半は、前回のつづきともいえるレクチャーコンサートを中心にお聴きいただきます。

Ensemble SolLa では、二人以上の歌や歌と楽器など複数の人で演奏するアンサンブルの活動をしています。いちおうクラシック音楽の枠組み内で、広いジャンル、時代の音楽を演奏していきたいと思っています。（そうでないと演奏する曲がないというせいもありますが）。

音楽のうちで、「うた」にはメロディーと言葉が、不可欠です。そしてある「うた」にとって、メロディーと言葉は不可分とも思えるのですが、歴史をたどると、言葉はメロディーを超えて、またメロディーも言葉を超えて、さらに国を超えて、時代を超えて、旅をしていることがわかります。その中でメロディーと言葉は出会い、幸せな組み合わせはひとびとに愛されるのです。その出会いを楽しんでいただければ幸いです。

プログラム

1. フランス 19 世紀の二重唱歌曲

サンサーンス (1835-1921)

《牧歌》 1855 デトゥーシュ

《来なさい》 c1855 ユゴー 詩

《タベ》 1857

フォーレ (1845-1924)

《この世では》 op. 10-1 c1863 ユゴー 詩

デュパルク (1848-1933)

《駆落ち》 1871 ゴーティエ 詩

マスネ (1842-1912)

《夢見よこのとき》 1871 ヴェルレーヌ 詩

フォーレ (1845-1924)

《金の涙》 op. 72 (1896) サマン 詩

2. M. ブラヴェ (1700-1768)

《フルート・ソナタ》 ニ短調 op. 2-2

Duos françaises au 19e siècle

Camille Saint-Saëns, 1835-1921

Pastorale / Destouches

Viens / Hugo

Le Soir

Gabriel Fauré, 1845-1924

Puisqu'ici - bas toute âme / Hugo

Henri Duparc, 1848-1933

La fuite / Gautier

Jules Massenet, 1842-1912

Rêvons, c'est l'heure / Verlaine

Gabriel Fauré, 1845-1924

Pleurs d'or / Samain

Michel Blavet, 1700-1768

Sonate pour la Flûte Traversière

休憩

3. ことばを超えて来たメロディーたち～唱歌・童謡編その2

お話と演奏

4. 愛悼 三善 晃 (1933-2013)

《正しい歌のうたいかた》 五味 太郎 詞

プログラムノート

(宮澤彰, 歌詞翻訳: 宮澤 彰, 宮澤友子)

1. 19 世紀フランスの二重唱歌曲 というのは、あまり知られていない分野である。日本では、フランス歌曲そのものがドイツ歌曲に比べて歌う人も少ない分野であるし、その中の二重唱というのは、音楽家であっても存在さえ知らないという人が多いのではないか。もちろん、オペラの世界は別で、例えばカルメンとドン・ホセの二重唱など数多くある。歌曲の世界ではあまり多くないとはいえ、書いている人はいるもので、今日はそのような作品を集めて演奏する。

サンサーンス(Camille Saint-Saëns, 1835-1921),デュパルク(Henri Duparc, 1848-1933),マスネ(Jules Massenet, 1842-1912),フォーレ(Gabriel Fauré, 1845-1924)は、ほぼ同じ時代に活躍した作曲家たち。マネ(Édouard Manet, 1832-1883)からモネ(Claude Monet, 1840-1926),ゴーギャン(Paul Gauguin, 1848-1903)といった印象派時代の画家たちとほぼ同世代である。象徴派詩人のマラルメ(Stéphane Mallarmé, 1842-1898),ヴェルレーヌ(Paul-Marie Verlaine, 1844-1896)とも同世代で、音楽では一世代下のドビュッシー(Claude Debussy, 1861-1918),サティ(Eric Satie, 1866-1925),ラベル(Maurice Ravel, 1875-1937)らとともにベルエポック(よき時代)のフランス文化を飾った。これらの名前を並べるだけでも、萩原朔太郎 1886-1942 が「行きたしと思えどあまりに遠し」とあこがれたフランスを彷彿させる。

彼らは、この時代のフランス歌曲の主要な作曲家たちではあるが、二重唱歌曲はせいぜい数曲しか書いていない。それも多くは若い時代の作品で、今日のプログラムではフォーレの《金の涙》1896 が唯一円熟期の作品といえよう。しかし、これらの二重唱歌曲は、若い時代のみずみずしさにあふれ、その中でも各作曲家の色が見られるところが魅力である。

サンサーンスは、彼らの中で先輩格にあたる。2 歳半でピアノを始め、3 歳半で作曲したというモーツァルトなみの神童で、13 歳でパリのコンセルヴァトワールに入学した。1853 年にパリのサン・セヴラン教会のオルガニストとして働き始めるころまでには交響曲を 2 つも書いている。歌曲も 6 歳! から書いているが、1855 年 20 歳で書いたこの曲が、おそらく最初の二重唱歌曲である。サ



1858 年のサンサーンス

wikimedia commons

ンサーンスの楽譜では、詩は、デトゥーシュ (André Cardinal Destouches, 1672-1749) とされているが、実際にはデトゥーシュ作曲のオペラ《Issé》1697 の 3 幕 5 場のアリアの詞に全く新しいメロディーを作曲したもの。したがって作詞としては、このオペラの台本を書いたモット (Antoine Houdar de la Motte, 1672-1631) とするべきかもしれない。この曲はマドモアゼル・マリー・レゼ Marie Reiset に献呈されている。彼女は、美術史家・蒐集家のフレデリック・レゼの娘、サンサーンスが恋心を抱いていたらしい。

Pastorale / Destouches

Ici les tendres oiseaux
Goûtent cent douceurs secrètes,
Et l'on entend ces côteaux
Retentir des chansonnettes
Qu'ils apprennent aux échos.

Sur ce gazon les ruisseaux,
Murmurent leurs amourettes,
Et l'on voit jusqu'aux ormeaux,
Pour embrasser les fleurettes,
Pencher leurs jeunes rameaux.

牧歌 / デトゥーシュ

ここで やさしい小鳥たちが
秘密の菓子を百もついばむ、
人は聞く 丘の斜面に
木霊が習った
うたが鳴り響くのを。

この芝のほitori 小川が
かりそめの恋をささやく、
人は見る ニレの若木までが
花々を抱こうと
その若枝をかたむけるのを。

サンサーンスは同じマリー・レゼに献呈したもう一つの二重唱を書いている。おそらく同じ年に書いたものと思われる。ソプラノとバリトンという組み合わせは、自分と彼女とで歌うことを想定したのであろう。詩は『レ・ミゼラブル』で有名なユゴー (Victor Hugo, 1802-1885) が 1846 年に出版した詩集から。サンサーンスはこの詩が気に入っていたのか、1885 年に同じ詩で、フルート入りの独唱歌曲《Une flûte invisible》を作曲している。

Viens / Hugo

Viens! — une flûte invisible
Soupire dans les vergers. —
La chanson la plus paisible
Est la chanson des bergers.

Le vent ride, sous l'yeuse,
Le sombre miroir des eaux. —
La chanson la plus joyeuse
Est la chanson des oiseaux.

Que nul soin ne te tourmente.
Aimons-nous! aimons toujours! —
La chanson la plus charmante
Est la chanson des amours.

来なさい / ユゴー

来なさい! — 見えないフルートが
果樹園の中でため息をつく —
最も穏やかなうた
それは羊飼いのうた。

風がトキワガシの下
暗い水の鏡にさざ波をたてる —
最も陽気なうた
それは鳥のうた。

何もきみを苦しめることのないように
私たちは愛する 永遠に愛する! —
最もすてきなうた
それは愛のうた。

2 年後、サンサーンスは、パリのマドレーヌ教会のオルガニストに転じた。その頃に作曲した《Le Soir》は、コントラルトとテノールの二重唱で、作詞者がわからない。ルグーヴェ (Ernest Legouvé, 1764-1812) 作詞と書いてある資料もあるが、出典が確認できず疑わしい。献呈は当時の有名なメゾソプラノ歌手ポーリーヌ・ヴィアルド (Pauline Viardot, 1821-1910) とテノール歌手イタロ・ガルドニ (Italo Gardoni, 1821-1882)。この二人が歌った可能性が大きいが確証は見つかっていない。2/2 拍子であるがバルカローレ (舟歌) の指定がある。

Le Soir

Le soir descend sur la colline;
La montagne au loin brille encor;
La fraîcheur sereine et divine
S'exhale des nuages d'or.

D'où vient le bonheur qu'on respire?
D'où vient cette étrange douceur?
D'où vient qu'il n'est pas de martyr
Qui ne cède au soir enchanteur?

Le lac, sur son eau transparente
Que ride à peine un souffle pur,
Laisse glisser la barque errante
Qui se mire dans son azur.

D'où vient qu'au suave murmure,
Au doux balancement des eaux,
Il n'est pas de douleur qui dure,
Et que l'oubli succède aux maux?

Lorsqu'au souffle des nuits prochaines
On vogue sur le lac profond,
D'où vient qu'on ne sent plus ses chaînes
Et qu'en désirs l'âme se fond?

C'est que sur l'eau, dans le silence,
Fuyant chaumières et palais,
L'esquif emporte une espérance:
Celle de n'aborder jamais!

C'est que, dans l'azur de ses voiles,
La nuit porte un espoir divin:
Celui d'un jour semé d'étoiles
Dont l'aurore croîtra sans fin!

タベ

夕やみが丘に降りたつ;
遠くの山がまだ輝いている;
澄み切った神々しい冷気が
金色の雲から立ちのぼる。

どこから来るのかこのほっとする幸せは?
どこから来るのかこの不思議な穏やかさは?
まるで殉教者ではないか
このタベの魅惑にあらがうのは?

湖, その透明な水の面に
清らかなそよ風がかすかに波をたてる,
その群青に姿を映す
ただよう小舟をすべり出そう。

なぜかこの心地よい水音,
水の穏やかな揺れの中では
苦痛は続かず
不幸もまた忘却へと沈むのではないか?

続く夜々の息吹に向けて
深い湖を漕ぎ渡るとき,
なぜ人はもはや束縛を感じず
魂は欲望によって立つのか?

水のほとりの草屋も宮殿も
静寂のうちに飛び去っていく
小舟は希望を運ぶ:
決して近づくことのない希望!

それは そのベールの群青の内に
夜がもたらす神のごとき希望:
星をちりばめたある日
その曙が 終わりにく広がるという希望!

サンサーンスは、1861年から1865年まで、ニーダーマイヤー学校でピアノの教授をした。ニーダーマイヤー学校（フランス語の発音に近くニデルメイエルと書くべきかもしれないが）は、スイスの Louis Niedermeyer, 1802-1861 が 1853 年にパリに開いた教会音楽の専門学校で、教会オルガニストや聖歌隊指揮者を育てる音楽学校であった。サンサーンスが着任した時、この学校に 16 歳のフォーレが学生として在籍していた（フォーレは 9 歳の時に入学し、20 歳のころまでこの学校に在籍している）。サンサーンスの授業は、ピアノや教会音楽にとどまらずシューマン、リスト、ワーグナーといったドイツの「現代」音楽、そして作曲法までにおよんだ。この出会いがなければ、フォーレは田舎の教会オルガニストで一生を終わっていたかもしれない。この勉強中 1863 年、ユゴーの詩にフォーレが書いた二重唱が《Puisqu'ici-bas toute âme》（この世では）。スタイルとしては、サンサーンスの二重唱とよく似ている。ちなみにサンサーンスは 1851 年に、この同じ詩に《Rêverie》（夢想）というタイトルで歌曲を書いているがそちらには似ていない。

《Puisqu'ici-bas toute âme》は、ソプラノ 2 人のための二重唱《Tarentelle》（1873 頃）と組み合わせて 1879 年に op.10 として出版された。出版譜では《Puisqu'ici-bas toute âme》の方は、ソプラノ 2 人またはソプラノとテノールの二重唱となっている。双方の曲とも、サンサーンスが《Le Soir》を献呈した歌手ポーリーヌ・ヴィアルドの 2 人の娘に献呈されている。ただし、《Tarentelle》の方では、妹がマドモアゼルなのに対し、《Puisqu'ici-bas toute âme》の方は 2 人ともマダムになっている。1863 年には、サンサーンスの《Le Soir》のようにソプラノ・テノール用に書いた二重唱を、1879 年に出版する際にソプラノ 2 人用にし、献呈も 1873 年の《Tarentelle》に合わせたものではないかと推測される。

Puisqu'ici-bas toute âme / Hugo この世では / ユゴー



フォーレが画いた
サンサーンス
(1900 年代?)



1864 年の学生フォーレ
Charles Reutinger 撮影
wikimedia commons

Puisqu'ici-bas toute âme
Donne à quelqu'un
Sa musique, sa flamme,
Ou son parfum;

Puisqu'ici toute chose
Donne toujours
Son épine ou sa rose
À ses amours;

Puisqu'avril donne aux chênes
Un bruit charmant;
Que la nuit donne aux peines
L'oubli dormant ;

Puisque, lorsqu'elle arrive
S'y reposer,
L'onde amère à la rive
Donne un baiser;

Je te donne, à cette heure,
Penché sur toi,
La chose la meilleure
Que j'ai en moi!

Reçois donc ma pensée
Triste d'ailleurs,
Qui, comme une rosée,
T'arrive en pleurs!

Reçois mes vœux sans nombre,
Ô mes amours!
Reçois la flamme ou l'ombre
De tous mes jours!

Mes transports pleins d'ivresses,
Purs de soupçons,
Et toutes les caresses
De mes chansons!

Mon esprit qui sans voile
Vogue au hasard,
Et qui n'a pour étoile
Que ton regard!

Reçois, mon bien céleste,
Ô ma beauté,
Mon cœur, dont rien ne reste,
L'amour ôté!

この世では あらゆる魂は
誰かに与える
その音楽を その情熱を
あるいはそのよい香りを;

ここでは あらゆるものは
いつも 与える
そのとげ 又 そのバラの花を
その愛するものたちへ;

4月は榎の木たちに
あるかわいい物音を与える;
夜は苦痛に与える
眠りで忘却することを;

休息を求めて
寄せる時
荒波は岸に
口づけを与える;

だから私はきみに与える このとき
君の上に身をかかめ
私の持ち物の中で
最も良いものを!

さあ これも受け取ってくれ
私の悲しみの思いも
それは一粒の露のようで
涙のうちにきみに届く!

受け取ってくれ 数えきれぬ私の願い
おお 私の恋を!
受け取ってくれ 熱情 あるいは 闇を
私の生涯すべての日々から!

陶酔に満ちた疑いなき
私の熱情を,
また 私のすべての愛撫を
私の数々の歌から!

ただよう私の心を,
帆もなく あてどなく
きみのまなざしだけを
星として!

受け取ってくれ, わたしの妙なる幸せ
おお わたしの美しきものよ
愛を取り去れば何も残らない
わたしの心を!

1871 年，サンサーンスは詩人・バリトン歌手のロマン・ビュシーヌ(Romain Bussine, 1830-1899)とともに国民音楽協会を立ち上げる。普仏戦争の敗戦とパリコミューンの混乱のさなかであったが，復員したフォーレやデュパルク，マスネも参加した。デュパルクは，フランク(César Franck, 1822-1890) の弟子であるが，もともと作品の数は少ない。その上，1885 年 37 歳の時，自分の作品を破棄するという行為に出た。理由は，神経過敏症とか，極端な自己批判とか説明されている。その後亡くなるまで 50 年近く，ほとんど作曲を行わなかった。残されている曲は，十数曲の歌曲を中心に二十数曲しかない。《La fuite》は，デュパルクが普仏戦争から復員し，国民音楽協会に参加し，結婚した 1871 年に書かれている。1903 年になって作曲家の許可を得て出版されたという彼の作品の中でも例外的な曲。テキストはフランスの詩人ゴーティエ(Théophile Gautier, 1811-1872) が 1845 年に書いた詩。演劇の台本の一部でもいいような内容であるが，独立した詩。曲もオペラの一場面のような二重唱になっている。



普仏戦争時のデュパルク
wikimedia commons

La Fuite / Gautier

Kadidja:

Au firmament sans étoile,
La lune éteint ses rayons ;
La nuit nous prête son voile.
Fuyons ! fuyons !

Ahmed:

Ne crains-tu pas la colère
De tes frères insolents,
Le désespoir de ton père,
De ton père aux sourcils blancs ?

Kadidja:

Que m'importent mépris, blâme,
Dangers, malédictions !
C'est en toi que vit mon âme.
Fuyons ! fuyons !

Ahmed:

Le cœur me manque ; je tremble,
Et, dans mon sein traversé,
De leur kandjar il me semble

駆落ち / ゴーティエ

カディジャ

星のない空
月はその光を消す；
夜が私達にそのベールをかぶせてくれる
逃げましょう！

アーメド

君は心配ないのか？
君の無礼な兄弟の怒り，
君の白い眉の父上
その父上の絶望が。

カディジャ

軽蔑，非難，
危険，呪いが何だというのでしょうか！
私の心はあなたの中で生きているのに。
逃げましょう！

アーメド

そこまでは思い切れない；私は震えている
彼らの短剣で
貫かれた私の胸の内

Sentir le contact glacé !
Kadidja:
Née au désert, ma cavale
Sur les blés, dans les sillons,
Volerait, des vents rivale.
Fuyons ! fuyons !

Ahmed:
Au désert infranchissable,
Sans parasol pour jeter
Un peu d'ombre sur le sable,
Sans tente pour m'abriter...

Kadidja:
Mes cils te feront de l'ombre ;
Et, la nuit, nous dormirons
Sous mes cheveux, tente sombre.
Fuyons ! fuyons !

Ahmed:
Si le mirage illusoire
Nous cachait le vrai chemin,
Sans vivres, sans eau pour boire,
Tous deux nous mourrions demain.

Kadidja:
Sous le bonheur mon cœur ploie ;
Si l'eau manque aux stations,
Bois les larmes de ma joie.
Fuyons ! fuyons !

その凍った感触が感じ取れるようだ！
カディジャ
私の純潔な雌馬は砂漠生まれ
麦畑を越え、畑の畝の中を
風と競い飛んでいくわ。
逃げましょう！

アーメド
砂の上に少しばかりの影を落とす
パラソルなしに
私を容れるテントなしに
超えがたい砂漠へ行くとは…

カディジャ
私のまつげがあなたに陰を作る；
そして夜は私の髪をテントの暗がりとして
私たちは眠るでしょう。
逃げましょう！

アーメド
いつわりの蜃気楼が
本当の道を隠したら
食べ物も飲み水もない、
私たち2人とも明日には死ぬだろう。

カディジャ
私の心は幸福に従う；
もし立ち寄ったところに水がないなら
私の喜びの涙を飲めばいい。
逃げましょう！

マスネもサンサーンス同様早熟で、11 歳でコンセルヴァトワールに入り、1863 年 21 歳の時にローマ大賞をとっている。マスネの曲としては《タイスの瞑想曲》が有名であるが、これは《タイス》というオペラの中の間奏曲。彼はオペラ作曲家として活躍したが、実はかなりの数の歌曲も書いている。《夢見よこのとき》は、象徴派の詩人ヴェルレーヌの有名な《優しき歌》に含まれる。この詩は、多くの作曲家を引きつけ、フォーレやショーソン（Ernest Chauson, 1855-1899）も作曲している（歌曲テキストのウェブサイトによれば 136 人！が作曲している）が、1870 年に出版されたこの詩に、最初に作曲したのがマスネであった。彼も参加した国民音楽協会の設立された 1871 年である（出版は 1872 年）。



ヴェルレーヌ《優しき歌》
1870

Rêvons, c'est l'heure / Verlaine

La lune blanche
Luit dans les bois ;
De chaque branche
Part une voix
Sous la ramée...

Ô bien aimée.

L'étang reflète,
Profond miroir,
La silhouette
Du saule noir
Où le vent pleure...

Rêvons, c'est l'heure.

Un vaste et tendre
Apaisement
Semble descendre
Du firmament
Que l'astre irise...

C'est l'heure exquise.

夢見よこのとき / ヴェルレーヌ

白い月
森の中に光る
枝々からほとぼしる
ひとつの声
その葉の下に...

ああ 恋しい人よ

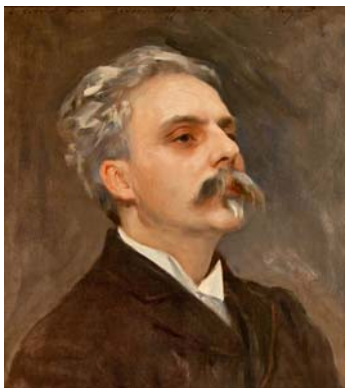
映し込む池
深い鏡
影を、
黒い柳の
そこで風がむせぶ...

夢見よこのとき

ゆったりと柔らかな
鎮まりが
降りてくるようだ
天空から
それは虹色の星...

それは快い時！

最後はフォーレ円熟期の唯一の二重唱。フォーレは 1896 年イギリスの出版社と契約を結び、彼の作品は最初にイギリスで出版され、後からフランスで出版されるようになった。さらにフォーレ自身、ロンドンに出かけて演奏会を開いたりしている。それだけイギリスでも人気のある作曲家となっていた。この曲は、1896 年 5 月 1 日にロンドンで開かれたフォーレ作品の演奏会（作曲家自身もピアノを弾いて参加した）用に書かれ、カミーユ・ランディ（Camille Landi: ソプラノ）とデイヴィッド・ビプシャム（David Bipsham: バリトン）が初演した。曲の献呈もこの 2 人になっている。詩は、象徴派の詩人アルベール・サマン（Albert Samain, 1858-1900）の詩集 *Au jardin de l'Infante*（1893）中の “Larmes”（涙）。フォーレがサマンの詩を知ったのは、当時彼の愛人であったエン



1889 年ころのフォーレ
John Singer Sargent 画
wikimedia commons

マ・バルダク（後にドビュッシーの二人目の妻となった女性）の薦めによるという。なお、タイトルが《Pleurs d'Or》なのは、すでに《Larmes》というタイトルの歌曲（Richepin 詩 op.51-1, 1888）を作っていたため、同じ「涙」の語 Pleur を用いて、フォーレが自分でつけたタイトルと考えられる。

Pleurs d'Or / Samain

Larmes aux fleurs suspendues,
Larmes aux sources perdues
Aux mousses des rochers creux ;

Larmes d'Automne épandues,
Larmes de cor entendues
Dans les grands bois, douloureux ;

Larmes des cloches latines,
Carmélites, Feuillantines ...
Voix de beffrois en ferveur ;

Larmes des nuits étoilées,
Larmes des flûtes voilées
Au bleu du parc endormi ;

Larmes aux grands cils perlées,
Larmes d'amantes coulées
Jusqu'à l'âme de l'ami;

Larmes d'extase,
éploement délicieux,
Tombez des nuits!
Tombez des fleurs!
Tombez des yeux!

金の涙 /サマン

吊された花々に涙
岩のくぼみに苔むして
涸れた泉に涙

ふりそそぐ秋の涙
悲しげな大きな森に
聞こえる角笛の涙

ラテンの鐘から涙
カルメル会、フойヤン会の修道女たち
鐘楼からの熱い響き

星降る夜の涙
くぐもったフルートの涙
眠れる庭園の蒼さに

真珠をちりばめた長いまつげに涙
彼の魂にまで流れ出す
恋人たちの涙

恍惚の涙
えも言われぬ悲嘆
夜々から落ちよ！
花々から落ちよ！
その目から落ちよ！

2. M.ブラヴェ（Michel Blavet, 1700-1768）は、18 世紀フランスを代表するフルート演奏家・作曲家。同世代のドイツのクヴァンツ（Johann Joachim Quantz, 1697-1773）とともに、現在のフルートの楽器としての地位を確立した人物。フランス語でフリュート・トラヴェルシエル flûte traversière, イタリア語でフラウト・トラヴェルソ flauto traverso, 日本語に訳せば横笛というこの楽器は、もちろん起源のわからないほど古くからある楽器であるが、西洋音楽の中ではブラヴェやクヴァンツの時代に広まって来た。それまでは笛 flute といえば縦笛, リコーダーのことだった。だから 18 世紀にはわざわざ「横」traversière という形容詞をつけて呼ばれたのであるが、19 世紀になると縦笛はすたれ、フルートといえば横笛をさすようにな

って今に至っている。作曲もしたプロイセンのフリードリッヒ 2 世(大王, 1712-1786 ,在位 1740-1786)がフルートを演奏したのがよく知られているが, ポピュラーな楽器を愛好したのではなく, 当時の最先端の楽器を好んでいたのである。

この曲は, 1732 年に出版された《通奏低音付きフルートソナタ集》Sonates mêlées de pieces, pour la flûte traversière, avec la basse の 2 曲目のソナタ。「通奏低音つき」が示すように, スタイルとしてはバロック音楽であるが, イタリア・フランスのスタイルの融合した古典派に近い音がする。アンダンテ / アレグロ (アルマンド) / モデラート (ガヴォット) / ラルゴ (サラバンド) / アレグロの 5 楽章からなる。

ブラヴェはスイスとの国境に近いブザンソンの木工職人の子に生まれ独学でフルート等の楽器を習得した。1723 年パリに出て, フルート奏者としてヨーロッパ最高といわれる存在になる。逸話を二つ。彼はフルートを左に構えて吹いた。独学の故であろうし, 自分用の楽器を作ったからともいわれている。もうひとつ, 皇太子時代のフリードリッヒ大王がブラヴェを自分の宮廷に招こうと, 何度か交渉したが彼は断った。結局もう一人の全欧的名手クヴァンツがその地位につく。ブラヴェが断った理由はわかっていない。

3. 「ことばを超えて来たメロディーたち～唱歌・童謡編その 2」 というタイトルで, Ensemble SolLa4 の続編。今回は戦後最初の音楽教科書で採用された外国曲を中心に, 団塊の世代になじみの曲を。

1947 年 (昭和 22 年) 新学制に対応した文部省製の音楽教科書が発行された。1947 年 5 月 15 日発行の『一ねんせいのおんがく』から 7 月 15 日発行の『六年生の音楽』まで 6 冊のこの教科書は, 文部省側から諸井三郎が参加し, 作曲家・音楽教育家の岡本敏明, 作曲家平井康三郎, 音楽教育家小林つやえ, 詩人勝承夫 (かつよしお) が委員となって編集した。戦前・戦中期の教科書で排除されていた外国の曲が復活したり, 新たに取り入れられたりしている。それにしても, 敗戦から実質一年あまりの期間に曲を選定し, 楽譜をそろえ, 歌詞を新作し印刷するという作業は大変だったろうと思う。しかし, この教科書が使われたのはわずかな間であった。1949 年 (昭和 24 年) には, 文部省作製ではなく, 検定制度による新たな教科書に変わった。ただし, その多くはこの 1947 年の教科書をモデルにしていたため, 実質的に戦後の音楽教育のもとを作ったのが, この教科書であったと言っていいたいだろう。

1. 最初の曲は、《むすんでひらいて》。『一ねんせいのおながく』の4曲目に作詞不明、作曲外国民謡としてはいつている。多くの本にルソー作曲とあるが、その根拠が1970年代に問題とされ若干の議論を呼んだ。この議論に決着をつけたのが海老沢敏先生の論考で、全容は1986年に『むすんでひらいて考』として岩波書店から出版された。考証は詳細でほぼ余すところがない。この本の内容をかいつまんで演奏を交えながら紹介する。



ルソー 《パントミーム》冒頭

結論からはじめると、《むすんでひらいて》がルソー（Rousseau, Jan Jacques, 1712-1778：フランス啓蒙期の思想家。フランス革命に影響を与えたとされる『社会契約論』などの著作がある。）の作曲であるというのは、まったくの虚偽ではないが言い過ぎ。ルソー原曲という言い方であれば許される。その「原曲」は、ルソーが1752年に初演したオペラ《村の予言者》Le Devin du Village 中の《パントミーム》Pantomime。オペラの中で演じられるパントマイムの伴奏曲で、弦楽にバスの入った合奏曲である（歌はつかない）。ルソーは仮に他の著作がなかったとしても、音楽事典には載る程度の音楽家でもあった。フルートのブラヴェとほぼ同じ時期に活躍している。このオペラは大ヒットし、当時の習慣でパロディやアリアの改作などさまざまな《村の予言者》の改作が行われた。その中に《パントミーム》を改作した《J.J.ルソーの新口マンズ》Nouvelle Romance de J. J. Rousseau と《メリッサ》Melissa という歌がある。《新口マンズ》はフランスで1770年代に、《メリッサ》は英国で1780年代に作られたと推定される。



クラマー《ルソーの夢》冒頭

Music Library - University of North Carolina at Chapel Hill

これらのうち、おそらく《新口マンズ》をもとに作曲された、《ルソーの夢》Rousseau's Dream というピアノ変奏曲が 1812 年英国で出版された。クラマー (Cramer, Johann Baptist, 1771-1858) というベートーベンと同世代の有名なピアニストの作曲である。この主題が、ほぼわれわれの知っている《むすんでひらいて》である。この変奏曲も英国でおおはやりし、いくつかの出版社から出版され、またフランス、米国でも出版された。これまた当時の習慣で、ヒットメロディーは賛美歌に転用される。

1819 年には、英国で “ Guide me O thou great Jehovah ” という歌詞で賛美歌集に掲載され、その後も英米を中心にさまざまな歌詞で賛美歌となった。その過程でこのメロディーは、Rousseau, Rousseau's Dream や Greenville という名前でよばれ、ルソーが夢の中で天使の歌を聴いて作曲したというような説話が付加されていった。維新後の日本にもいち早く賛美歌として Greenville が取り入れられ、1874(明治 7)年出版の本に《キミノミチビキ》という賛美歌として掲載されている。

賛美歌にとどまらず、このメロディーは恋歌、子守歌、フォークソング、器楽曲さらに遊戯歌として米英を中心に転用されていく。それらのうち、フォークソングとなった《Go tell aunt Rhody》は、米国で今なお記憶されているフォークソングである。

Go tell aunt Rhody

Go tell aunt Rhody
The old gray goose is dead.

The one she's been saving,
To make a feather bed.

She died in the mill pond,
From standing on her head.

ロディーおばさんに言っといで

ロディーおばさんに言っといで
灰色の婆さんガチョウが死んだって。

おばさんが羽布団を作るため
とっといたやつだ。

婆さんガチョウは水車池で死んだ
頭を下に逆立ちして。

以下略

19 世紀に米国でこれだけはやっていたメロディーが、1882(明治 15)年出版の『小学唱歌集』に取り入れられたのは、この唱歌集が、米国留学から帰ったばかりの伊沢修二 1851-1917(いざわしゅうじ)と、米国でその師であったルーサー・メーソン (Luther Whiting Mason, 1818-1896) を中心に編纂されたという事情からして、いわば当然である。『小学唱歌集』ではその初編の第 13 曲《見わたせば》として取り入れられている。第 13 曲ではあるが、その前の 12 曲は音階練習曲のようなものであるから実質的な第 1 曲ともいえる。

作詩は、柴田清熙（しばたきよる）第2節は稲垣千穎が補作している。

伊沢の『唱歌略解』によれば柴田は「以前音楽取調掛二出勤」していた人物であり、小学唱歌集の中でもこの曲の作詞しかしていない。柴田がいつ音楽取調掛をやめたのかはわからないが、この一つしか作詞していないことから比較的短い時期しかいなかったと思われる、このメロディーの

採用が、編纂のきわめて早い段階に決まっていたことが推測できる。さらに伊沢は、「楽譜は仏国の学士にして音楽に著名なるルーソウ氏が睡眠中に作りたる曲にして広く諸邦に行はるるもの也」と注釈している。米国で流布していたルソーの夢の説話を伊沢が紹介したものであろう。4/4 拍子で2分音符で始まるというこの楽譜は、数ある《ルソーの夢》の中でも少数派であるが、小学唱歌集編纂時に直接参照した楽譜が何であったかは（直接参照した楽譜があったかどうかも含め）不明である。



小学唱歌集初編（1882）第十三《見わたせば》

国立国会図書館近代デジタルライブラリー

見わたせば

見わたせば。あをやなぎ。花桜。
こきまぜて。みやこには。
みちもせに。春の錦をぞ。
さほひめの。おりなして。
ふるあめに。そめにける。

2 番略

この詩は、古今和歌集春歌上の素性法師の歌「花ざかりに京をみやりてよめる：みわたせば 柳桜をこきまぜて 宮こそ春の錦なりける」を下敷きにしている。「こきまぜて」は、混ぜ合わせての意。「みちもせに」は路も狭しとばかり。「さほひめ（佐保姫）」は春をつかさどる女神。「おりなして」は織って作るの意。

日本に入っても、さまざまに転用されるのはこの曲の運命なのか、日清戦争期には、「見渡せば、寄て来る、敵の大軍、面白や」という軍歌となる。幼稚園での遊戯歌《むすんでひらいて》となるのもかなり早い時期であっ

英米，日本でこれだけ普及した《ルソーの夢》であるが，なぜかルソーの活躍したフランスでも，あるいはドイツでもほとんど忘れ去られて（あるいは知られずに）いるという点も面白い。

この曲も、唱歌として取り入れられたのは早い。音楽取調掛が編纂した『幼稚園唱歌集』（1887 明治 20 年出版）の、第 27 曲《蜜蜂》である。作詞は不明。本題からは外れるが、ソからレまでというこの音域は、幼児が歌うにはどう考えても高すぎる音域である。『一ねんせいのおんがく』では八長調でドからソとなっている。後に述べる原曲がこのト長調であったせいかもしいないが、『幼稚園唱歌集』で八長調ドからソ、幼稚園唱歌集』ではト長調ソからレまでという音域になっている。わからない。



幼稚園唱歌集（1887）第二十七《蜜蜂》

国立国会図書館近代デジタルライブラリー

はちよみつばちよ。
花には戯れず。そが露もちきて。
かもせ。ながみつを。

2 番略

この曲の「原曲」は、ドイツで今でも広く親しまれている童謡《Summ summ summ》。日本ではブンブンと表す羽音が、ドイツ語では summ summ となるわけで、村野四郎の詩は、この一行に関しては原曲に対応した訳となっている。「原曲」ドイツ語の作詞はファラースレーベン（Hoffmann von Fallersleben, 1798-1874）。ドイツ国歌となった詩を書いた詩人である。『非政治的な歌』というタイトルの政治的な詩集を出し、生涯に 39 回も国外追放になったという詩人が追放先で書いた童謡集の『50 の童謡』Fünfzig Kinderlieder, 1843 に《Biene》（ミツバチ）というタイトルで発表された。曲は民謡 Volksweise となっていて、ライプチヒ音楽院の和声と対位法の教授リヒター（Ernst Richter, 1808-1879）の伴奏譜がついている。



Fallersleben, Fünfzig Kinderlieder より

Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen

Biene

Summ summ summ!
 Bienchen summ' herum!
 ei! wir thun dir nichts zu Leide,
 flieg' nun aus in Wald und Heide!
 Summ summ summ!
 Bienchen summ' herum!

Summ summ summ!
 Bienchen summ' herum!
 such' in Blumen, such' in Blümchen
 dir ein Tröpfchen, dir ein Krümchen!
 Summ summ summ!
 Bienchen summ' herum!

Summ summ summ!
 Bienchen summ' herum!
 kehre heim mit reicher Habe,
 bau' uns manche volle Wabe!
 Summ summ summ!
 Bienchen summ' herum!

ミツバチ

ぶん ぶん ぶん
 ミツハチ まわりをぶんぶんと
 やあ きみに悪さはしないから
 森や原っぱに飛んでいけ!
 ぶん ぶん ぶん
 ミツハチ まわりをぶんぶんと

ぶん ぶん ぶん
 ミツハチ まわりをぶんぶんと
 花々めぐって さがしまわれ
 おまへのしずく おまへのパンを!
 ぶん ぶん ぶん
 ミツハチ まわりをぶんぶんと

ぶん ぶん ぶん
 ミツハチ まわりをぶんぶんと
 どんさり収穫 持ち帰り
 蜜いっぱいのお巣を作っておくれ!
 ぶん ぶん ぶん
 ミツハチ まわりをぶんぶんと

以下略

『一ねんせいのおんがく』では曲はボヘミア民謡としている。ドイツの本でもボヘミア民謡とされている。Wikipedia では 1825 年に(メロディーが)記録されたとしているが、確認はとれていない。ちなみにこの曲、ドイツと日本以外ではあまり知られていない曲のようである。

今日の演奏は、オリジナル編曲の二重唱で。

3. 《メリーさんの羊》は、『一ねんせいのおんがく』の 5 曲目に《わたしのひつじ》という曲として入っている。作詞勝承夫 1902-1981 (かつよしお), 作曲外国曲。よく知られた歌詞は高田三九三 1906-2001 (たかださくぞう) のものである。勝は、1947 年の教科書の編集委員の一人であるが、この教科書で採用された曲のうち 37 曲 (3 割弱) に作詞している。

原曲はアメリカ民謡《Mary had a little lamb》。現代の米国人が誰でも知っている歌といっていいだろう。



Mary had a little lamb, little lamb, little lamb, Mary had a little lamb, Its fleece was white as snow.

Mary had a little lamb

歌詞は作家・編集者のヘール (Sarah Josepha Hale, 1788-1879) が 1830 年に雑誌に発表した詩, 同じ年に出版した子どものための詩集 “Poems for Our Children” に “Mary’s lamb” の題で採録されている。

MARY’S LAMB

Mary had a little lamb,
Its fleece was white as snow,
And everywhere that Mary went
The lamb was sure to go;

He followed her to school one day
That was against the rule,
It made the children laugh and play,
To see a lamb at school.

And so the Teacher turned him out,
But still he lingered near,
And waited patiently about,
Till Mary did appear;

*And then he ran to her, and laid
His head upon her arm,
As if he said ‘I’m not afraid*

メリーさんの羊

メリーさんは羊を飼っていた
その毛は雪のように白かった
メリーさんが行くところはどこでも
その羊はついて行った。

ある日羊は学校について行った
それは規則に反していた
でも、子どもたちは笑って遊んだ
学校に羊がいるなんて。

そこで先生は羊を追い出した
でも羊はあたりにとどまって
辛抱強く待っていた
メリーさんが出てくるまで。

それからメリーさんのところに駆けよって
メリーさんの腕をまくらに横たわった
まるで言っているようだった

You 'll keep me from all harm.'

'What makes the lamb love Mary so?'
The eager children cry
'O, Mary loves the lamb, you know,'
The Teacher did reply;

*'And you each gentle animal
In confidence may bind,
And make them follow at your call,
If you are always kind?'*

メリーさんがいるから大丈夫。

なんで羊はメリーさんがそんなに好きなの？
子どもたちは訊いた
それはメリーさんが羊を愛しているからよ
と 先生は答えた。

おとなしい動物は
見えない絆で結ばれて
よべばいつもついて来るようになるの
いつでも親切にしていれば。

斜字で記した連は現在歌われない。

この詩は、実話に基づいている。マサチューセッツ州中部のスターリングという町にいたメアリ・ソーヤー (Mary Sawyer) という女の子が飼っていた子羊を学校に連れて行って騒ぎになった。たまたま学校に来ていたジョン・ルールストンという若者が、それを詩にしたという。そのときの詩とヘールの出版した詩との関係は分明ではないが、最初の 1 連あるいは 2 連がルールストンという説もある。ちなみに、メアリ・ソーヤーの住んでいた家は、2007 年に放火で焼けるまで残っていたという。学校の方は今でも残っているし、スターリングの町にはメリーさんの羊の銅像もある。

発表された詩には当然、メロディーはついていない。この詩に最初に作曲したのは、ローウェル・メーソン (Lowell Mason, 1792-1872) で、1831 年に出版した “Juvenile Lyre” という歌集に《Mary's Lamb》という題で発表した。ローウェル・メーソンは賛美歌《もろびとこぞりて》や《主よみもとに》を作曲した音楽家・音楽教育家。この楽譜を見ると、現在の《Mary had a little lamb》とは全く違ったメロディーである。にもかかわらず《Mary had a little lamb》の作曲者はローウェル・メーソンとした資料も散見される。

MARY'S LAMB.

61

Allegro.

Mary had a little lamb, Its fleece was white as snow, And everywhere that

Instrument.

Lowell Mason, Mary's Lamb 1831 冒頭

それでは、今知られている《Mary had a little lamb》の作曲は誰か？という
と、実はわかっていない。フルド James Fuld の “ The Book of
World-Famous Music ” によれば、1868 年出版の “ Carmina Collegensia ”
(大学歌集) という各大学の学生歌を集めた歌集のホバート大学の部に、
今のメロディーの Mary had a little lamb が載っている。これが確認できる
限りで、このメロディーとこの歌詞が結びついた最初のものでされている。
しかし、1867 年に出版された “ Carmina Yalensia ” (イェールの歌集) と
いうイェール大学の学生歌集に《Good night》という曲 (Good night ladies
として有名な曲であるが) があって、この曲の後半に《メリーさんの羊》
のメロディーが “ Merrily we roll along ” という歌詞で出てくる。

GOOD NIGHT.

Sostenuto.

p 1. Good night, ladies! Good night, ladies! Good night, ladies! We're going to leave you now.

Allegro.

f Merri - ly we roll along. roll a long, roll a-long, Merrily we roll along, o'er the dark, blue sea.

Repeat pp

《Good night》 Carmina Yalensia 1867 より University of Pittsburgh Library System

実はイエールの歌集には、別に《Mary had a little lamb》が載っている。現在のメロディーともローウェル・メーソンの曲とも異なっている（歌詞も若干異同あり）。さらに、大学歌集のホバート大学の部には、もうひとつ別にジョーンズ提督という作曲者名で《Mary's little lamb》という曲も載っていて、第1節の歌詞は《Mary had a little lamb》と同じである。どうやら、この詩は19世紀半ばには、すでになんかなり広く知られ、さまざまなメロディーで歌われていたということであろう。これらのうちで、《Good night》の後半“Merrily we roll along”のメロディーを転用したホバート版の《Mary had a little lamb》が、19世紀の終わりころまでには定着し普及したと思われる。ホバート版のメロディーがイエールの“Merrily we roll along”に転用されたということもあり得るが、可能性は低い。理由は、原詩からこのメロディーを発想するのは、形式的に無理があるという音楽的な点、Merrily が Mary に転じる方がその逆よりはありそうだという感覚的な点、そしてイエール大学のものがホバート大学に影響するという方が、その逆よりはありそうだという社会的な点である。もっとも、イエールの Merrily we roll along もまたわれわれの知らない歌からの転用という可能性も否定できない。いずれにしても、この有名なメロディーの作曲者は謎のままである。

最後に、フルドの本に出ている後日談をふたつ。エジソン(Thomas Edison, 1847-1931)が1877年に蓄音機を作ったとき、最初に録音したのが“Mary had a little lamb”であった。最初の録音は残っていないが、後に作製した盤のデジタル版がウェブ上でアクセスできる。残念ながらエジソンは歌ったのではなく、詩を朗読しただけである。もうひとつ、1972年にニューヨークのサザビーで、「メリーさんの羊からとったウールの一片と詩の手稿」が競売にかけられたという。いくらで誰に売れたかは書かれていない。

4. 《アマリリス》は、『四年生の音楽』の15曲目にこの題名ではいつている。作詞岩佐東一郎、作曲 フランス民謡。この曲、フランス民謡となっているが、歌ではなく器楽曲である。「みんなできこう、たのしいオルゴールを」というこの歌詞は、したがって岩佐東一郎の完全な作詞。

詩人岩佐東一郎 1905-1974（いわさとういちろう）は、1947年の音楽教科書の中で勝（37曲）に次ぐ18曲の作詞・訳詞をしている。しかし、なぜこれらの歌詞で普及したものは少なく、この《アマリリス》とベートーベンの第9の「晴れたる青空」くらいではないか。



Henri Ghys, Air 1875 冒頭 IMSLP

《アマリリス》の原曲は、アンリ・ギス (Henri Ghys, 1839-1908) というフランスのピアニスト・作曲家が 1867 年にパリで出版した (フランス国立図書館の目録による) ピアノ曲で、《国王ルイ 13 世作曲のエール。アンリ・ギスによるピアノ編曲》“ Air composé par le roi Louis XIII transcrit pour le piano par Henri Ghys ” とタイトルにある。1871 年にニューヨークで出版された楽譜ではタイトルに《アマリリス》と付加されていて、ギスがもとのエールのタイトルを《アマリリス》であると言ったらしい。ギスについては、ラヴェル (Maurice Ravel, 1875-1937) が 7 歳でついたピアノの先生であったこと、何曲かのピアノ曲を残したこと以外あまりわかっていない。このエールのメロディーは、確かにギスのオリジナルではないのであるが、ギスが言ったルイ 13 世 1601-1643 (在位 1610-1643) の作曲ではなく、もっと古い曲であることがわかっている。

1581 年フランス王太后カトリーヌ・ド・メディシ (Catherine de Medicis) の宮廷で王妃主催の Balet Comique de la Roynes という一大イベントが行われた。王妃の妹マルゲリートの結婚祝いの一部であるこの催しは、ホメロスのオデュッセイアからとられた筋立てにしたがい、踊り、歌、音楽、朗読が組み合わされた総合芸術で、宮廷バレエというジャンルのおこりといわれ、また少し後のオペラの出現にも影響した。王や王妃も出演し、4 時間以上 (6 時間という説も) の時間と金貨 100 万枚以上の費用を費やした。プロデュース・演出は音楽家・振付師のボージョワユー (Balthazar de Beaujoyeux, ?-1587)。音楽は、王室音楽家のサルモン (Jacques Salmon) とバス歌手のボーリュウ (Girard de Beaulieu)。楽譜付きのリブレットが 1582 年に出版された。この中で「キルケが彼女の庭から出るときの鈴の音」というト書きで《アマリリス》のメロディーの楽譜が現れる。このメロディー自体の作曲がボージョワユー、サルモンあるいはボーリュウのうち誰かまではわからない。

BALET COMIQUE

Le son de la clochette, auquel Circé sortit de son Iardin.

S V P E R I V S.



Balet Comique de la Roynie 1582 より Bibliothèque nationale de France - Gallica

ギスがこのメロディーを用いて『ルイ 13 世作曲のエール』を作ったことはほぼ確実である。しかし、ギスがどこからこのメロディーを知ったか、なぜこれがルイ 13 世作曲になったか、なぜこれをアマリリスと呼んだかは、残念ながら今のところわからない。ただし、ルイ 13 世作詞・作曲の《アマリリス》とよばれる曲は確かに実在した。

*Chanson composée par le Roy, & mise en tablature par le Sieur de la Barre, Epinette
& Organiste du Roy & de la Reyne.*



L'Harmonie Universelle 1637 より IMSLP

ルイ 13 世当時の科学者マラン・メルセンヌ (Marin Mersenne, 1588-1648) が著した “L'Harmonie Universelle” という音と音楽の理論書のオルガンの章に、「王の作曲したシャンソン」として載っている。王の作曲した歌を、王室オルガニストのド・ラ・バール (Pierre Chabanceau de La Barre, 1592-1656) がオルガン譜にしたものを書いてある。

Amaryllis

Tu crois, ô beau soleil,
Qu'à ton éclat rien n'est pareil.
En cet aimable temps
que tu fais le printemps.
Mais quoi, tu pâlis
Auprès d'Amaryllis.

アマリリス

美しき太陽よ おまえは信じている
おまえの輝きに 並ぶものはないと
この愛すべき 季節のうちに
おまえが春を もたらすのだから
だが何とそのおまえすら蒼ざめる
アマリリスの前には

詩は、太陽である王がアマリリスという女性を讃えている。この女性としていくつかの資料に Mme. Hauteville や Hautefort という名前があげられているが、傍証がない。ルイ 13 世は、当時の王として珍しく女嫌いといわれるほどで、少なくとも公知の愛妾はいなかった。アマリリスへの賛美は、あるいは中世風の女性賛美だったものか？そのあたりは、不明である。この曲には、前記のド・ラ・バールあるいはその息子ジョセフ・ド・ラ・バール (Joseph Chabanceau de La Barre, 1633-1678) が作ったとされる diminution (変奏曲のようなもの) の楽譜も残されている。

5. 《クラリネットこわしちゃった》は、1947 年の教科書にはのっていない。この曲は、NHK の『みんなのうた』で 1963 年 2 月に放送されて有名になった。訳詞石井好子、演奏ダークダックス。この曲の原曲は、フランスの童謡で《J'ai perdu le do de ma clarinette》(ぼくのクラリネットのドをなくしちゃった)。

「オー・パッキアマラド・パッキアマラド・パオ・パオ・パ」という繰り返しがあり有名であるが、実はこれ、れっきとしたフランス語で、原曲の“ Au pas camarade, au pas camarade, au pas, au pas, au pas. ” (足並みそろえて、同志よ、足並みそろえて) をそのまま使っているのである。「パオパオ」ではなく、「オー・パ、オー・パ」！どうして「同志」が出てくるのかというと、この部分、もともと違う曲からの転用なのである。

Chanson de l'oignon

J'aime l'oignon frit à l'huile
J'aime l'oignon quand il est bon.
J'aime l'oignon frit à l'huile
J'aime l'oignon, j'aime l'oignon.
Au pas camarade, au pas camarade
Au pas, au pas, au pas.

Un seul oignon frit à l'huile
Un seul oignon nous change en lion.

タマネギの歌

油であげたタマネギが好きだ
タマネギが好きだ うまいから
油であげたタマネギが好きだ
タマネギが好きだ タマネギが好きだ
足並みそろえて 同志よ
足並みそろえて。

油であげたタマネギひとつで
タマネギひとつで おれたちはライオンに変わる

Un seul oignon frit à l'huile
Un seul oignon nous change en lion.
Au pas camarade, au pas camarade
Au pas, au pas, au pas.

油であげたタマネギひとつで
タマネギひとつで おれたちはライオンに変わる
足並みそろえて 同志よ
足並みそろえて。

以下略

《タマネギの歌》Chanson

del'oignon という軍歌！である。フランス大革命 1789 の後の革命軍，共和国軍からナポレオンの軍隊で歌われていたという。同志よ camarade といういいかたは，革命軍を想起させる。もっとも，このメロディーも，前半のタマネギ部分と後半の Au pas, camarade は別の起源をもっているという可能性は十分ある。

Chanson de l'oignon

France, ca. 1800



《J'ai perdu le do de ma clarinette》の方であるが，いつ頃どのようにできた歌かは，知られていない。ただ，おそらくは 19 世紀のおわりころ，早くとも 19 世紀の後半にフランスで生まれたと推測できる。なぜなら，19 世紀の後半にいくつもの童謡歌集が出版されているが，有名なものをいくつか調べた範囲ではこの曲は見あたらない。また，Google Books で調べる限り，この曲の題名が出現するのは，Jeanne Gariel というフランス人の 1906 年の日記が最初で，19 世紀には見あたらない。1920 年代にはフランスの週刊誌の記事に登場するし，1930 年代にはフランスの宣教師の書いた本の中に，この曲を歌って歓迎してくれたという文がでてくる。少なくともその頃にはポピュラーな曲になっていたはずである。また，1855 年にパリで《ドの音をなくした男》Un homme qui a perdu son "do" という軽喜劇 Vaudeville が上演されている。このタイトルがこの歌の成立に影響したという可能性は，十分考えられる。逆にこの歌からこの喜劇が生まれたという可能性は，この劇の筋立てからしてほとんどあり得ない。

また，フランス以外の国で生まれた曲が移入されたという可能性も低い。ヨーロッパの他の国に，この曲の痕跡がほとんど見られないためである。ポルトガル語のものは，日本と同様，明らかにフランス語のこの歌の輸入である。スウェーデンには，“Au pas, camarade” のメロディーを持った《Små grodorna》（小さなカエル）という歌があるが，《タマネギの歌》が英国経由で輸入されたと考えられている。

J'ai perdu le do de ma clarinette,

J'ai perdu le do de ma clarinette,
Ah ! si papa il savait ça, tralala,
Il dirait: Ohé !

Tu n' connais pas la cadence,
Tu n' sais pas comment l'on danse,
Tu n' sais pas danser
Au pas cadencé!
Au pas, camarade, au pas, camarade,
Au pas, au pas, au pas.

ぼくのクラリネットのドをなくしちゃった

ぼくのクラリネットのドをなくしちゃった
パパがこれを知ったら、トララ
おーい というだろう
おまえはリズムを知らないな
踊りかたも知らないな
踊れないじゃないか
リズムに合わせて！
足並みそろえて 同志よ
足並みそろえて。

2 番以下略

原曲には、メロディーも歌詞もいくつか異なった版が存在するが、今日演奏するのは、日本で知られている『みんなの歌』版から最も異なっているもの。「おまえはリズムを知らないな」(Tu n' connais pas la cadence) 以下の 4 行の歌詞とメロディーが加わっている。この歌詞の「リズムに合わせて」(Au pas cadencé!) から、歌詞が似ているということで、よく知られていた《タマネギの歌》の“ Au pas camarade ” がくっついて来たのではないかと推測するがどうであろう。

今日の演奏は、ピアノ伴奏の二重唱に編曲したオリジナル版。

4. 三善晃 (1933-2013) 《正しい歌のうたいかた》2000 は、合唱団 “Voices わ” のために書かれた未出版の合唱曲。2013 年 10 月に亡くなった三善晃を愛しみ悼んで。かつての “Voices わ” のメンバーを中心に少人数の合唱で演奏します。

三善先生から私たちの聞いた言葉 — 「音楽は、人の中からわき出てくるようなことをよく言いますが、それはちがいます。人の周りにあってそれが人の中に入り出てくるものです。それがどこまでその人の奥深くまで入って出てくるか、それが問題なのです。」 「また、奥深くまで入って来られるようにするには、周りを豊かにしておく必要があります。」 “Voices わ” は、1999 年に宮澤らが創設した十数人の合唱団で、2006 年まで活動した団体です。創設したすぐ後から、三善先生に演奏するための曲を委嘱していました。三善先生の「周りを豊かに」するために、さまざまなテキストを送った中に、五味太郎の絵本『正しい暮らし方読本』がありました。この絵本に《正しい電信柱ののぼり方》や《正しい靴のはき方》などと共に《正しい歌の歌い方》というページがあります。三善先生の言葉とも通じるところがあるから、選ばれたのでしょうか。

正しい歌のうたいかた

どこからなのかは
よくわかりませんが
歌はなにしろやってくるものです。

そして
ひとの中へ
ずっと入ります。

入ったわりには
すぐ出たがります。
ま、でるのが仕事ですから。

で、とりあえず口からでます
それがいわゆる歌です。

ですから、その歌が、すこし変でも
ひとに責任はありません。やって
きた「歌」のもんだいです。

楽譜のタイトルページには、(option 団歌？)と書いてあります。実は、この曲の1年前、「団歌」を書いてもらっているのです。「わたし たわし / わたがし わし / わかし ゆわかし / わりした わりかん / ...」という《わならべうた》(宮澤友子詩)を送りました。三善先生からの返信は、「ワイン片手に 和音つけ / 和気藹々の 若やぐ笑い / ... / 轍の割り符 わきまえた」。しばらくして《わならべうた》の楽譜が来ました。この曲、数十人の大合唱を念頭に作曲されたようで、十数人の合唱団で歌うのはなかなかつらい曲でした。演奏を聴いた三善先生も「もう少し大人数かと思った。...」。ということがあって、少人数の合唱を前提にこの《正しい歌のうたいかた》を作ってくれたのだと思います。この2曲は、“Voices わ”の演奏会では毎回歌っていました。

真摯なアマチュアの音楽家には、どこまでも優しい三善先生でした。

宮澤 友子

その昔...縁側で童謡の本を1人で歌っていた女の子。はじまり...勤め先の旭硝子コーラス部。皆、年取っても素敵な仲間。その次...栗山文昭氏指揮、女声、混声合唱団で20数年。合唱漬け、様々な舞台。濃い仲間と、生涯の伴侶との出会い。わかれ道...大規模化、商業化を離れ、個の自立。ムズカシイ少人数活動。そして今...最小単位から再スタート。共に歩んでくれている宮澤彰、荻堂綾（発声）、長崎麻里香のお三方が、今の私の先生。そして、ありがとう、仲間たち。

宮澤 彰

学生時代から合唱を始める。東京大学柏葉会合唱団で学生指揮者。中世音楽合唱団、クール・ブリエール、東京オルフェオンに所属、合唱団 OMP で団内指揮者を17年つとめる。声楽を築地文夫氏、石野健二氏に師事。カトリック由比ヶ浜教会聖歌隊指揮者。

長崎 麻里香

15歳で渡仏し、パリ・エコール・ノルマル音楽院コンセルティストディプロム取得。パリ国立高等音楽院を満場一致の最優秀の成績で卒業。F・プーランク国際ピアノコンクールにてプーランク作品優秀賞、サン・ヌム・ラ・ブルテッシュ国際ピアノコンクールにて最年少優秀賞を受賞。パリ、サル・コルトーでのソロリサイタル、A・コルトー記念演奏会、その他欧米各地での演奏会に出演。ソロのみならず、室内楽奏者、伴奏者としてのコンサートにも多数出演し、共演者からも厚い信頼を得ている。2014年にソロ・アルバム「Le Gazouillement さえずり～フランス・ピアノ作品集～」をリリース。
<http://marikanagasaki.com>

森本 薫

野口龍氏のもとで現代音楽を学ぶ。その後古楽器に転じ、トラヴェルソ、リコーダー、ヴィオラ・ダ・ガンバ、通奏低音などを学ぶ。オールドフルートとの出会いを契機にフルートに復帰。古楽器の方法論を古典派、ロマン派の音楽にも適用すべく研究している。地域の活動やヴォランティア演奏にも積極的に取り組んでいる。

小島 直子

ピアノを大島正泰、江戸京子、チェンバロと通奏低音を故鍋島元子、室内楽を有田正広、オルガンを石田一子、林佑子の各氏に師事。チェンバロ、オルガン、クラヴィコードのソロおよび通奏低音奏者として、またアンサンブルピアニストとして、各種鍵盤楽器を使用した演奏活動を行っている。 関東学院大学チャペルオルガニスト

大場 点

1987年千葉大学大学院理学研究科修了。千葉大学合唱団学生指揮者、コーロ・カロス団内指揮者を務め、その間、合唱指揮者栗山文昭氏のもとで研鑽を積む。1998年に混声合唱団「クール・ルシャン」を創設し、指揮者に就任。指揮活動の他、器楽曲や歌謡曲などの合唱用編曲や、チラシ・プログラム等のデザインなど、マルチな活動をこなす。

《正しい歌のうたいかた》合唱

堀切 由美子

三宅 千代

平田 薫

宮澤 友子

宮澤 彰

柚木 彰

印南 幸夫

二宮 正紀

大場 点

アンサンブル SolLa4
Ensemble SolLa4

Thanks to

川里 久雄

川里 洋子

松井（荻堂）綾

松井 武臣

堀切 由美子

平田 薫

北 有子

田中 直子

渡部 千賀子

鈴木 利一(表紙 絵)

荒牧 亀太郎

2013-08-04 Ensemble SolLa4(横浜市イギリス館ホール)で戴きました木戸銭 26,500 円は、8 月 14 日に朝日新聞厚生文化事業団あて寄付いたしました。なお、今回の木戸銭も、全額を被災地域の子ども支援に寄付させていただきます。

アンサンブル ソラ
Ensemble Solas

at 横浜みなとみらいホールレセプションルーム